保育方法論と保育実習
－4 年間にわたる保育実習の評価表から授業のあり方を考える－

濱田敏子*、辻野順子、中重直俊、木原　裕

姫路日ノ本短期大学, 〒679-2151 兵庫県姫路市香寺町香呂 890 番地

Childcare methodology and childcare practical training
～Think about how classes should be given to students
from evaluation criteria of childcare practice over 4 years～

Toshiko Hamada, Junko Tsujino, Naotoshi Nakashige and Hiroshi Kihara

Himeji Hinomoto College, 890 Koro, Kodera-Cho, Himeji, 679-2151, Japan
* To whom correspondence should be addressed (hamada@himeji-hc.ac.jp)

１．はじめに

保育者養成校における「保育方法論」は、その授業の到達点の一つとして１年次に学んだ講義や実習を振り返り、保育の方法を考察することが挙げられる。考察方法とは、実習時の体験から、保育者、保育の対象、保育の場の分析を行い､その分析から保育者としての援助､介入、指導のあり方を導き出す方法である。

従って、保育方法論は、学生の実習体験が大きなウエイトを占めることになる。

本研究は、学生が保育実習で評価された実習評価表の分析を行い、学生の実習における特徴を見出し、指導教員が学生を指導する際の具体的な資料とする。４年間にわたる実習評価表を縦断的に分析することにより、学生の特徴の年代別変化を把握することができ、学生の保育の資質や能力がわかり、指導教員の授業内容や指導のあり方を検討する際に有効に働く。

保育所保育指針が改正され、保育所の役割、保育士の業務、保育所の社会的責任が明確化され、保育士のさらなる専門性、資質向上が求められており、次代の保育士となる人材を育成する養成校の責任もますます大きくなってきている。近年は教育全般にわたって、体験学習の必要性が見直されてきているが、保育士を目指す学生にとって、「保育実習」は、保育士資格を取得するための必修科目と位置づけられている。

保育実習の目的は､「指定保育士養成施設における保育実習実施基準について」（厚生労働省）に､「保育実習は､その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする」と明記されている。

本学においてもその目的に沿って必修科目である保育実習Ｉを１年次の 11 月に、選択必修科目である保育実習Ⅱを２年次の５月に実施している。保育実習は、学生が保育現場で子どもと一緒に生活し体験を通して子どもへの理解や愛情を深め､保育者の指導や援助を受けながら、理論と実践の関係や、保育の内容・方法など保育の実際を学ぶ場である。また、保育士を目指している自分自身の思いを確認し、保育士としての使命感を養い、更には、人として社会人として、自分自身を見つめる機会になる。

２．研究目的

本研究の目的は、1 年次に行う保育実習Ｉと

* 姫路日ノ本短期大学　教授

２年次に行う保育実習Ⅱの保育園実習先の評価を縦断的に検証し、その変動から保育実習の成果や課題を明らかにすると共に、学生への授業のあり方について考える資料とすることである。

また同様に、過去４年間のデーを分析し、実習指導方法の再考と授業内容のポイントの見直しに役立てることを目的とする。

３．方法

①調査年度と研究対象者の人数

（保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの両方の実習を行った学生）

2013 年度　38 名

2014 年度　26 名

2015 年度　25 名

2016 年度　25 名

②保育実習期間

保育実習Ⅰ（１年次 11 月）　10 日間

保育実習Ⅱ（２年次　６月）　10 日間

③評価尺度

保育実習評価表（13 項目（1. 健康状態 2.言葉遣い 3.取り組み 4.身だしなみ 5.表情 6.協調性 7.技能 8.発達理解 9.指導力① 10.指導力② 11.観察力 12.考察力 13.表現力 ）があり 5 件法で評価する。13 項目は 3 つのカテゴリー（実習態度・保育能力・実習記録）から構成される。そして、学生の実習先保育所(園)の実習指導者が評価する(表１参照)。

④保育実習評価表のデータからの検証、及び考察の内容

次の４項目に焦点を当て、データ分析を行った。

1) 2013 年・2014 年・2015 年・2016 年の４年間の保育実習Ⅰと保育実習Ⅱを対象に、カテゴリー間の有意差検定を行う。

2) 2013 年・2014 年・2015 年・2016 年の各年における保育実習Ⅰのカテゴリー間の関連性と保育実習Ⅰと保育実習Ⅱのカテゴリー間の関連性を検証するため、相関係数を求める。

3) 2013 年・2014 年・2015 年・2016 年の各年における保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの各カテゴリーの変化を知るために、有意差検定を行う。

4) 2016 年の保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの保育実習評価表の各項目についての変化を知るために、有意差検定を行う。

４．研究結果と考察

1) 保育実習の年度別に保育実習Ⅰと保育実習Ⅱのカテゴリーの平均値(SD)を示した（表２）。2013 年・2014 年・2015 年・2016 年の４年間について、カテゴリー間の有意差検定を行った結果、実習記録Ⅰにおいて、2014 年と 2015 年の間に有意差を認めた。2015 年度は2014度よりも有意に高い(図１参照)。４年間にわたる他のカテゴリー間では、有意差を認めていない。

実習記録の評価については、学生個人の自己分析力と文章表現力等が問われる。毎年、集団として向上することが望ましいが、学生の能力的個人差がみられるのも事実であり、2014 年と 2015 年では、実習記録Ⅰの評価に差を認めた。

2) 2013 年・2014 年・2015 年・2016 年の各年における保育実習Ⅰ、及び、保育実習Ⅱの実習態度・保育能力・実習記録の関連性を検証するため、相関係数を求めた(表３～表６)。各年を比較すると、相関の強弱に差がみられたが、各実習時期において有意な相関が認めている。実習態度・保育能力・実習記録の３カテゴリーは、保育実習Ⅰにおいても保育実習Ⅱにおいても、相互に関連している。上記の３カテゴリーは、相互に関連し合いながら影響する資質であるといえる。

3) 各年における実習態度と保育能力、そして、実習記録の 3 カテゴリーにおける保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの経験的・学習的変化（成長）を知るために、有意差検定を行う。各年の保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの同

じカテゴリーを対比させ有意差検定を行った。2016 年の保育能力Ⅰと保育能力Ⅱ、そして、実習記録Ⅰと実習記録Ⅱに有意傾向を認めた（表 7）。保育能力は、学生の技術的能力と学習能力が反映される能力である。保育実習Ⅰの経験に学内での学習が効果的に積み重なり、保育実習Ⅱにおいて評価が上がったと考える。

また、実習記録の評価が有意に上がった点においては、実習記録の項目である観察力、考察力、そして表現力の向上の表れである。これらの力の向上は、実習園で受けた指導の結果であることは言うまでもなく、学内における各教科の指導の成果であるともいえる。いずれにしても、学生自身の実習に向けての真摯な態度と日々の努力の結果である考える。図２と図３は、保育実習ⅠとⅡの保育能力と実習記録の得点の変化を個人別に対比させたグラフである。

2015 年の実習記録Ⅰと実習記録Ⅱには有意差を認めた（表８）。2014 年の保育能力Ⅰと保育能力Ⅱに有意差を認め、実習記録Ⅰと実習記録Ⅱに有意傾向を認めた（表 9）。保育能力Ⅰよりも保育能力Ⅱが有意に高くなった。実習体験や学内の指導が生かされた結果だといえる。実習記録Ⅱにおいても、実習記録Ⅰよりも有意に高くなっている。2016 年次と同様に、実習園での指導や学内での指導の効果、そして学生本人の努力の結果であるといえる。2013 年には、保育実習Ⅰと保育実習Ⅱに有意差を認めたカテゴリーはなかった（表 10）。

2016 年から過去４年間の保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの変化（成長）を振り返ってみると、過去３年間（2016 年・2015 年・2014 年）において、保育実習Ⅰと保育実習Ⅱに有意な差を認めたのは、保育能力と実習記録である。この２つのカテゴリーは個人の能力が問われるカテゴリーであり、自分と向き合い努力すれば、評価に影響するカテゴリーであるといえる。

一方、４年間を通して、もう１つのカテゴリーである実習態度に有意な差を認めることはなかった。実習態度は、健康状態・言葉遣い・取り組み・身だしなみ・表情・協調性から構成されているカテゴリーである。これらの項目は、個人の資質や日常的な態度が問われる。従って、保育実習Ⅰを終えての学びが直ぐに、保育実習Ⅱの結果に結びつくことは少ないと考えられる。

2016 年に保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの間に有意差傾向を認めた保育能力と実習記録について、その変化（差異）が視覚的にわかるように重ね合わせプロットで示した。保育実習Ⅰの方が保育実習Ⅱよりも評価が高い学生もみられるが、相対的に保育実習Ⅱが保育実習Ⅰよりも評価が高くなっているのがわかる（図２と図３）。

4) 2016 年の保育実習評価表の各項目について、保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの有意差検定を行った。2016 年の保育能力ⅠとⅡ、そして、実習記録ⅠとⅡに有意傾向を認めたことから 2016 年の項目別有意差検定を行うこととした。また、より最近のデータを使用することにより、実習指導者自身が実感をもって受け止められる、と言える。結果は表 11 に示したように、保育能力の項目である発達理解に有意傾向を認め、指導力②に有意差を認めた。実習記録の項目では、考察力に有意差を認め、表現力に有意傾向を認めた。

有意差と有意傾向を認めた項目は、いずれも実習園での指導と学内での指導、そして、学生の努力が反映する項目であり、保育実習Ⅰでの経験や学内での学習の成果が保育実習Ⅱの評価に繋がったと考えられる。

５．保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの各保育園の指導者による所見

今回の研究は、評価における課題を認識すること等を中心に取り組んでいるため、

保育園側評価の自由記述からも考えてみることとする。

＜各保育園の指導者による所見＞

・積極的に子どもたちに関わり、子どもたちも寄っていく姿が見られた。日が経つにつれ雑用にも自分から気づき動いていた。設定では反省点もみられたが、きちんと計画をたて子ども共に楽しめていると感じた。
・どの子どもたちにも笑顔で優しく接している姿に好感が持てた。
・毎日、意欲的に指導案、記録、評価反省を担当職員に尋ねていた点は素晴らしい所である。得意な点を保育に取り入れていた事が良かった。
・大変前向きに実習に取り組もうとする姿勢が見られた。子どもの発達理解、内面を理解しようと努力していた。
・子どもの視線になり、トラブルや日々の活動を良く観察することが出来ていた。保育者のアドバイスを素直に取り入れ、取り組む事が出来ており、頑張っていた。
・事前にどのような設定保育にしようかと考えていて、実習に対する意欲的な態度が感じられた。また、子どもの名前を早く覚えて、クラスになじもうとする姿勢も感じられた。
・二週間の実習の中で、毎日目標を持って実習に取り組む事が出来ていた。子ども一人一人の性格を理解しながら、その子どもに応じた関わりを心掛けてすることが出来ていた。責任実習でも季節に応じたものや、子どもたちが興味を持っているものを取り入れ、堂々と日々前向きに保育することが出来ていた。
・子どもたちの目線に合わせ、言葉をかけたり思いを聞いたりして、どのように関わればいいのかと真摯に受け止め考えていた。子どもたちが今しか出来ない遊びの中で、何が学びに繋がるのか、計画をたてる重要性に気づいていた。
・積極的によく頑張っていた。実習生だが、指導者の立ち位置と重ならないように自分が今どの子どもと関わればよいのかを考え動くということが自然に出来ていた。どんな時も平常心で子どもに関わることが出来ていたところも良かった。
・温かく優しい口調や表情で、子どもや保護者、職員と接し、穏やかな雰囲気であった。前回の反省を踏まえ自身の課題を明確にし、積極的に取り組もうと努力していた。指導案に基づいて保育を展開できた喜びを感じながらもしっかり振り返り、次への課題を見出し、どんな時にも素直に前向きな姿に好感が持てた。
・意欲的で常に子ども側に立ち、考えようとする姿がみられた。行動力があり、テキパキと仕事に取り組むなど、好感が持てた。
・真面目に実習に取り組み、子どもたちに笑顔で接し関わっていた。素直で態度もとても好印象だった。自己反省しながら、設定保育では自分が考えていた通りには出来なかったようだが、次はこうしたらよいかなと保育をする上で学ぶ事が多かったと思う。
・前向きに真面目に明るい表情で、日々実習に取り組むことができた。責任実習では、悩みながらも自分で計画し、準備を進め、よく考えて保育することができ、振り返りでも、上手くいったこと、反省すべきことが、把握できていた。実習記録の書き方には課題が多くあるが、一生懸命に書いた意欲は受け取れた。
・毎日明るく職員や子どもと挨拶を交わし、元気よく実習に取り組んでいた。特定の子どもだけではなく、積極的に誰とでも関わる姿が見られ、それぞれの子どもに合った関わりに気づこうと心掛けていた。分からない事や不安な事は何でも質問していたので部分実習も気持に余裕をもって取り組めていた。流れを頭の中でシュミレーションすると、よりよく保育ができるのではない

かと思う。

・初めは緊張していたが、少しずつ笑顔が増え、子どもたちに優しく声を書けている姿を多く見ることができた。毎日の絵本や紙芝居は、季節を良く考え選び、子どもたちはとても喜んでいた。控え目な所があり、自分の考えを保育者に上手く伝えられず、困ってしまい、戸惑う場面があったが、よく気がつき、「手伝うことありますか？」「私します。」と動いていた。

・子どもとの関わりで大切にしなければならないことを保育士と確認し、それらを忠実に行おうと努力していた。子どもたちが楽しく、また、一人ひとりが自分の思いで活動する設定保育の準備を丁寧にする姿が見られた。

・大変真面目で手遊びや絵本の読み聞かせ等、日々練習を重ね、保育の準備も指導を基に積極的に進め取り組む事ができた。研究保育では、わらべうた遊びを通して子どもたちと共に成功した事を喜び、達成感を味わうことで大きな自信へと繋がったように思われる。自ら質問し行動する積極性もあり、意欲的に子どもと関わる姿に好感が持てる。

・子どもの目線で声を掛け、保育教諭の援助、配慮にも目を向け、一つでも多くの事を身につけたい、学びたいという気持ちが行動となり表れていた。責任実習では、しっかり一人ひとりと向き合って丁寧に関わったり、寄り添ったりする姿が見られ、その後も自身の保育を振り返り、次への課題を見出していた。

・子どもたち一人ひとりに声をかけながら、遊びに参加したり子どもたちの出来ない所を手助けしたりしていた。子どもたちが好感を持ち、よく話しかけいた。今後はもっと積極的に子どもと関わって色々な事にチャレンジして下さい。

・子どもとの関わりで大切にしなければならないことを保育士と確認し、それらを忠実に行おうと努力していた。子どもたち一人ひとりに笑顔で優しく接し、子どもたちが仲良く遊べるように心掛けていた。園の保育に関して積極的に学ぼうとする姿が見られた。

＜実習担当者から学生へ＞

・学んだ知識が現場でも活かされる事を期待する。

・今後は保育技能が向上するよう実践を積み重ねてもらいたい。

・コミュニケーション能力の向上に努めてもらいたい。

・保育実践においてもっと意欲的に取り組む姿勢が見られたらと思う。

・失敗を恐れず、積極的な態度を期待したい。

６．学生がめざす保育士像

以下は保育実習を終え、保育士を目指す学生の保育者像である。

・いつも元気で笑顔な先生

・子どもの思いを受け止め、皆で共有、共感していくことができる環境作りの出来る保育士になりたい

・子どもにさりげない援助や環境構成を考え、子どもの世界を大切にする。本当の親のように温かく大らかでいたい。

・些細なところまで気づかい、子どものためにと常に考え笑顔で優しく声かけも温かい先生

・子どもに将来「先生みたいな保育士になる」と言われるような保育士

・自分の中で何か大切にしたいものを持っておき、子どもが先生に会いたいと思ってもらえるような保育士

・笑顔が素敵で子どもに良い事は良い、悪い事はあかんと「メリハリ」を伝えられるような保育士。子どもの表現力を伸ばせる人

・子どもの姿をしっかりみて、ちょっとした子どもの成長も見逃さない。子どもの目線になって寄り添える保育士

・誰に対しても平等
・一人一人に合わせた保育をすることができる保育士
・子どもからも保護者からも信頼される保育士。真面目にする時、思いっきり遊ぶ時のメリハリのある保育士
・子どもに好かれる保育士。なるべく多くの事を経験させてあげられる保育士
・子どもの「やりたい！」気持ちを大切に援助できる保育士
・元気で明るい保育士
・何でも注意ばかりしていたり、怖い顔をしたりしていると、子どもは怖いイメージになるから、注意より他のできている子どもを褒めて、見本にさせる等、配慮できて笑顔がたくさんな保育士
・頼りになる先生
・子どもたちに優しく、楽しい時は一緒に楽しみ、悪い事をした時には子どものために叱り、けじめのある先生になりたい
・子ども、保護者と信頼関係を築くことのできる保育士
・子どもの気持ちに立って何かを考えられる保育士
・女性ではできないような保育をしたい（男子学生）
・明るく笑顔でニコニコ、あの先生に聞いてもらいたいという穏やかな雰囲気の先生になりたい
・子どもに指示がしっかり通り、子どもたちとたくさん遊んでハキハキ堂々とした保育のできる先生！
・体調を良好にし、いつでも明るい笑顔で子どもたちに優しく接せる先生
・しんどい、つらいと思っても子どもには常に笑顔でいられる保育士
・子どもたちに信頼され、保護者からも信頼関係される保育士
・優しくて一人ひとりの気持ちに寄り添える明るい保育士

７．おわりに

2013 年度から 2016 年度までの保育実習 I、II の評価を経年的な縦断検証を行った。結果は特に 2014 年度と 2015 年度の間で、実習記録 I に有意な差が認められた。このことの原因としては次の 3 点が考えられる。(1) 学生のレベルが有意に上がってきた、(2) 教員の教育スキルが向上した，(3) 実習担当園と教員の間の実習への取り組みのスキルが向上した。

著者らは、(1) が確かに成り立つという印象は持っているが，現在は学生のレベルについて他の参考になるデータが乏しく、はっきりとは言えない。一方、(2) と (3) については、この間の教員のスキルの向上とそれに伴う実習担当園とのコミュニケーションのスキルの向上は実感しているところである。今後も実習の評価は、本学の教育の成果そのものであることをよく噛みしめ、実習のスキルの向上を図っていきたい。

加えて、実習評価の分析は、「保育方法論」の授業をより充実させ、発展させるものである。本論文では、実習評価表の分析を行い、そして、各保育園の指導者による所見と学生がめざす保育士像を掲載した。データ分析という客観的事実と実習園の指導者と学生の気持ち（主観的事実）の記載が、論文をより深化させたと考えている。

引用・参考文献

1. 神長美津子・塩美佐枝　編著 (2014) 保育方法　光生館
2. 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2015) 幼保連携型認定こども園 教育・保育要領解説 フルーベル館
3. 幼稚園教育要領（前文）保育所保育指針（抜粋）　幼保連携型認定こども園 教育・保育要領（抜粋）(1997) 建帛社
4. 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018) 幼保連携型認定こども園　教育・保育要領 ＜平成 29 年告示＞　フルーベル館
5. 生活技術教育研究会　(2014) 保育・福祉専

門職をめざす学習の基礎　ななみ書房
6. 徳永満理　編著　(2015) 幼稚園・保育園実習まるごとおたすけガイド チャイルド本社
7. 田中まさ子　編　(2013) 幼稚園・保育所実習ハンドブック（株）みらい
8. 「幼稚園・保育所・福祉施設　実習ガイドブック編集委員会」編集 (2006) 幼稚園・保育所・福祉施設　実習ガイドブック　（株）みらい
9. 久富陽子　編著 (2014) 学びつづける保育者をめざす実習の本　萌文書林

表１　保育実習評価表

実習態度	1. 健康状態	身体的・精神的に良好な状態で取り組めたか
	2. 言葉遣い	保育現場においての話し方（挨拶・敬語）は適切であったか
	3. 取り組み	職員に指導・助言をもとめるなどの積極的な取組であったか
	4. 身だしなみ	実習中の身だしなみ（服装・髪型・化粧）は適切であったか
	5. 表情	子ども、職員、関係者への表情は豊かであったか
	6. 協調性	職場での社会性・人間関係がとれていたか
保育能力	7. 技能	意欲的に専門知識・技術を学んでいたか
	8. 発達理解	子どもの発達に関心を持ち、それに応じた関わり方ができたか
	9. 指導力①	環境構成において意欲的な取り組みができたか
	10. 指導力②	子どもの基本的生活習慣に関し、適切な介助・指導ができたか
実習記録	11. 観察力	実習記録において注意深く観察できていたか
	12. 考察力	実習記録において自分の実習を分析・反省し、検討していたか
	13. 表現力	正しい文字・文章表現がなされていたか

表２　年度別によるカテゴリーの平均値(SD)

2013 年度		2014 年度		2015 年度		2016 年度	
カテゴリー	平均値(SD)	カテゴリー	平均値(SD)	カテゴリー	平均値(SD)	カテゴリー	平均値(SD)
実習態度Ⅰ	21.8(3.9)	実習態度Ⅰ	22.0(5.0)	実習態度Ⅰ	21.9(3.9)	実習態度Ⅰ	22.5(3.7)
保育能力Ⅰ	12.9(2.4)	保育能力Ⅰ	12.5(2.4)	保育能力Ⅰ	13.0(2.3)	保育能力Ⅰ	13.3(2.0)
実習記録Ⅰ	9.8(2.6)	実習記録Ⅰ	8.8(2.3)	実習記録Ⅰ	10.0(2.4)	実習記録Ⅰ	9.9(2.3)
実習態度Ⅱ	22.7(4.5)	実習態度Ⅱ	22.3(3.6)	実習態度Ⅱ	21.6(4.4)	実習態度Ⅱ	23.3(4.1)
保育能力Ⅱ	13.5(3.2)	保育能力Ⅱ	13.4(2.2)	保育能力Ⅱ	12.9(3.1)	保育能力Ⅱ	14.2(2.6)
実習記録Ⅱ	9.6(3.2)	実習記録Ⅱ	9.3(2.3)	実習記録Ⅱ	9.5(2.7)	実習記録Ⅱ	10.5(2.3)

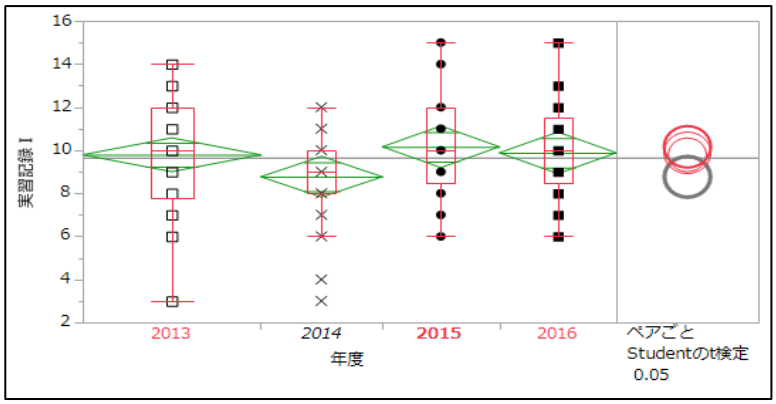

図１　各年度による実習記録Ⅰの比較

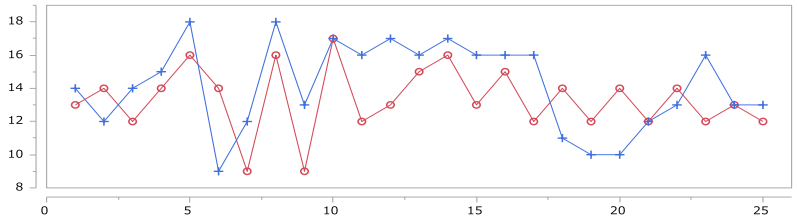

図２　保育実習ⅠとⅡの保育能力の変化　　保育能力Ⅰ　保育能力Ⅱ

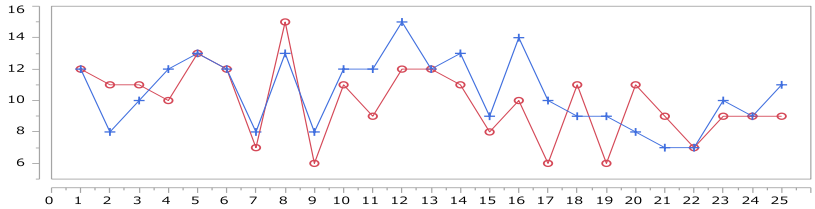

図３　保育実習ⅠとⅡの実習記録の変化　　実習記録Ⅰ　実習記録Ⅱ

表３　保育実習Ⅰと保育実習Ⅱのカテゴリー間の相関係数　（2013 年）

	実習態度Ⅰ	保育能力Ⅰ	実習記録Ⅰ	実習態度Ⅱ	保育能力Ⅱ
保育能力Ⅰ	0.63*				
実習記録Ⅰ	0.69*	0.61*			
実習態度Ⅱ	0.09	0.09	-0.10		
保育能力Ⅱ	0.23*	0.25*	0.02	0.82*	
実習記録Ⅱ	0.27*	0.22*	0.18	0.75*	0.85*

＊＝ $p<0.05$

表４　保育実習Ⅰと保育実習Ⅱのカテゴリー間の相関係数　（2014 年）

	実習態度Ⅰ	保育能力Ⅰ	実習記録Ⅰ	実習態度Ⅱ	保育能力Ⅱ
保育能力Ⅰ	0.82*				
実習記録Ⅰ	0.38*	0.36*			
実習態度Ⅱ	0.50*	0.48*	0.37*		
保育能力Ⅱ	0.46*	0.45*	0.59*	0.66*	
実習記録Ⅱ	0.27*	0.25*	0.70*	0.47*	0.71*

＊= p<0.05

表５　保育実習Ⅰと保育実習Ⅱのカテゴリー間の相関係数　（2015 年）

	実習態度Ⅰ	保育能力Ⅰ	実習記録Ⅰ	実習態度Ⅱ	保育能力Ⅱ
保育能力Ⅰ	0.77*				
実習記録Ⅰ	0.76*	0.73*			
実習態度Ⅱ	0.72*	0.69*	0.74*		
保育能力Ⅱ	0.49*	0.55*	0.51*	0.86*	
実習記録Ⅱ	0.54	0.60*	0.80*	0.82*	0.77*

＊= p<0.05

表６　保育実習Ⅰと保育実習Ⅱのカテゴリー間の相関係数　（2016 年）

	実習態度Ⅰ	保育能力Ⅰ	実習記録Ⅰ	実習態度Ⅱ	保育能力Ⅱ
保育能力Ⅰ	0.76*				
実習記録Ⅰ	0.60*	0.70*			
実習態度Ⅱ	0.57*	0.42*	0.23*		
保育能力Ⅱ	0.54*	0.41*	0.32*	0.70*	
実習記録Ⅱ	0.64*	0.52*	0.61*	0.48*	0.64*

＊= p<0.05

表７　保育所実習Ⅰと保育所実習Ⅱによる実習評価表のカテゴリー別有意差検定結果（2016 年）

カテゴリー	平均値（SD）	カテゴリー	平均値（SD）	t 値	p 値
実習態度Ⅰ	22.5(3.7)	実習態度Ⅱ	23.3(4.1)	10.95	n.s.
保育能力Ⅰ	13.3(2.0)	保育能力Ⅱ	14.2(2.6)	1.640	†
実習記録Ⅰ	9.9(2.3)	実習記録Ⅱ	10.5(2.3)	1.569	†

†= p<0.1　n.s.= non significance

表８　保育所実習Ⅰと保育所実習Ⅱによる実習評価表のカテゴリー別有意差検定結果（2015 年）

カテゴリー	平均値（SD）	カテゴリー	平均値（SD）	t 値	p 値
実習態度Ⅰ	21.9(3.9)	実習態度Ⅱ	21.6(4.4)	0.513	n.s.
保育能力Ⅰ	13.0(2.3)	保育能力Ⅱ	12.9(3.1)	0.225	n.s.
実習記録Ⅰ	10.2(2.4)	実習記録Ⅱ	9.5(2.7)	-2.091	*

* = p<0.05　n.s.= non significance

表９　保育所実習Ⅰと保育所実習Ⅱによる実習評価表のカテゴリー別有意差検定結果（2014 年）

カテゴリー	平均値（SD）	カテゴリー	平均値（SD）	t 値	p 値
実習態度Ⅰ	22.0(5.0)	実習態度Ⅱ	22.3(3.6)	0.347	n.s.
保育能力Ⅰ	12.5(2.4)	保育能力Ⅱ	13.4(2.2)	1.765	*
実習記録Ⅰ	8.77(2.3)	実習記録Ⅱ	9.27(2.3)	1.438	†

* = p<0.05　† = p<0.1　n.s.= non significance

表 10　保育所実習Ⅰと保育所実習Ⅱによる実習評価表のカテゴリー別有意差検定結果（2013 年）

カテゴリー	平均値（SD）	カテゴリー	平均値（SD）	t 値	p 値
実習態度Ⅰ	21.8(3.9)	実習態度Ⅱ	22.7(4.5)	0.997	n.s.
保育能力Ⅰ	12.9(2.4)	保育能力Ⅱ	13.5(3.2)	1.021	n.s.
実習記録Ⅰ	9.8(2.6)	実習記録Ⅱ	9.6(3.2)	-0.260	n.s.

n.s.= non significance

表 11　2016 年における保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの項目間の有意差検定結果

		保育実習Ⅰ	保育実習Ⅱ	t 値	有意差
実習態度	1. 健康状態	4.0(1.0)	4.2(1.0)	1.04	n.s.
	2. 言葉遣い	3.8(0.8)	3.9(0.8)	0.90	n.s.
	3. 取り組み	3.4(0.8)	3.6(1.0)	1.07	n.s
	4. 身だしなみ	3.9(0.8)	4.2(0.6)	1.43	n.s
	5. 表情	3.8(0.8)	3.7(0.9)	0.29	n.s
	6. 協調性	3.6(0.6)	3.6(1.0)	0.21	n.s
保育能力	7. 技能	3.4(0.6)	3.5(0.8)	0.68	n.s
	8. 発達理解	3.4(0.6)	3.8(0.8)	1.77	†
	9. 指導力①	3.3(0.6)	3.3(0.9)	0	n.s
	10. 指導力②	3.2(0.6)	3.5(0.6)	3.10	**
実習記録	11. 観察力	3.4(0.9)	3.5(1.0)	0.20	n.s
	12. 考察力	3.3(0.8)	3.6(0.9)	3.38	*
	13. 表現力	3.2(0.8)	3.4(0.8)	1.66	†

** = p<0.01　* = p<0.05　† = p<0.1　n.s.= non significance